

## 山本真司

Shinji Yamamoto

昭和33年生まれ、神奈川県横浜市出身  
経営コンサルタント ベイン・アンド・カンパニー・ジャパン 代表パートナー  
経営コンサルティングの傍ら、著述を行う。著書に、「40歳からの仕事術」(新潮新書)、「会社を変える戦略」(講談社新書)、「30歳からの成長戦略」(PHP研究所)、「20代仕事筋の鍛え方」(ダイヤモンド社)などがある。



### 将来は荘内に拠点をつくろう

数年前、仕事で数ヶ月山形県に通いつめるという貴重な経験を味わった。鶴岡に何度となく足を運び、陽明学の風の名残を肌を感じ、壮麗な出羽三山に足を運び、山海の美味を味わい、ホテルに帰ってホテルの屋上の露天風呂で夜空を眺めるという日々であった。礼節を重んじる純朴であり、かつ生活と心、知性の豊かさを感じさせる山形人の方々の語らひは、横浜生まれ、横浜育ち、東京在住の私の心の奥底にある日本人の原風景を呼び覚ましてくれたようだ。

どうやら、この体験が私の人生設計を大きく変えてしまったようだ。私は、東京で持ち家を買う計画は当面ない。私はもうすでに48歳を迎えている。いま、考えているのは、荘内の地に土地を買うことである。東京で勤務し、荘内で遊び、憩い、そして学ぶ。そんな人生もあっても良いのではないかと真剣に考え始めている。

山形・荘内に土地を買おうと考えるにいたったのは、山形・荘内の人、文化、食、土地に触れた経験だけが原因ではない。たまたま、経営コンサルティングの仕事で、シニア市場、団塊の世代市場の研究をしたことも大きなきっかけになった。これらの仕事から、個人としては3つのことを学んだ。

第一に引退後の団塊世代の“不安”な日々の姿である。アメリカでは、一足先に引退期を迎えるベビーブーマーベビーに対する研究が盛んに行われた。この研究を目にするまでは、退職金、親からの相続を前提として、お金も、時間もあふ豊かで消費性向の高い層の大量出現という皮相的な見方しかできなかった。しかし、アメリカの調査を見て愕然とした。これからは、“不安とリスク”に直面した人生が待っているというのである。その最大の要因は“長寿化”リスクであるという。長く生きることがリスクなのだ。社会保障、健康保険に対する不安感、いわば制度疲労の不安感のなかで、生きていることでお金がかかると認識している人々が多いのである。「生きているけど、生活を維持する金がない。誰にも助けてもらえない」そういう日が来るかもしれないというのが長寿化リスクである。

第二に、したがって、お金をうまく運用することは必須の知識になるのみならず、引退後もお金が稼げるように工夫すること、なるべく、強制的に貯蓄できるように習慣付けること、そして、なるべくお金のかからない生活をするということ、長寿化に備えた人生設計が新たに必要になることである。引退、退職を視野に入れると、こうした自分の経済的な自立のための戦略がお金の面でも必要になることである。

第三に、引退後に我々を襲うモロトリアム症候群の存在である。これは特に仕事一本で、真面目に真剣に仕事に邁進してきたビジネス・パーソンに起こりがちである。仕事一筋というのは聞こえは良いし、正しいことと信じてきた。しかし、見方を変えれば人生の楽しみ、生きがいを会社という組織に依存し続けたがゆえに、個の自立化が遅れてしまうという反作用をももたらすのである。私も、このリスクに気がつき、遅ればせながら趣味を持つように心がけている。

東京で仕事し、仕事に依存した人生を送ってきている私の、引退後の姿を想像してみた。東京に住み続け、長寿を切望する一方で、高い生活費に苦しみ、かつ新しい人生での個の自立に悩み、結局、生きてはいるが焦燥感と不安にさいなまれそうになる自分をそこに発見した。

「良い地方に拠点を設けておこう」。そんな気持ちが潜在意識に生まれてくることは自然の成り行きだったのだろう。荘内・山形では、私の興味のある修験道の世界の勉強もできる、最近趣味で始めた写真の素材に苦労することはない。きれいな空気で、安心して美味しい食は健康的長寿を保証してくれそうだ。そして、生活費も東京の比ではない。

「将来は荘内に拠点をつくろう」荘内からの帰路に45分で済む飛行機ではなく、鶴岡駅から夕方発の「キラキラ羽越」に乗り、車窓から日本海に沈む夕日を見つめ、地酒を嗜みながら考えた結論である。

